



福島のももは太陽の光をたっぷり浴びた真っ赤な見た目と糖度の高さが特徴。多彩な品種があるので食べ比べるという楽しみもある



Yのように見える樹形と、上から見た時にXに近い形に枝を剪定するのが福島のももの木の基本

夏はもも。

福島産なら

さらなり！

吾妻連峰と阿武隈高地に囲まれた盆地にある福島市。寒地系と暖地系、両方の果物を作ることができる恵まれた気候と品種改良、技術革新のおかげで毎年、多種多様な果物がたわわに実ります。まさに「くだものの宝石箱」と言われるゆえんです。中でも盆地特有の寒暖差が育む甘いももは、7月から9月までたっぷり楽しめます。待ちに待ったももの季節にお届けする今号は、福島のももをこよなく愛する皆さんに伺ったももの魅力と可能性をお届けします。

(樺山果樹園のもも畑にて。撮影時期：5月中旬)



特集

未来をつなぐももの絆

くだものの宝石箱 ふくしま市

「農業はいいぞ」と聞いて育った5代目

一歩郊外に踏み出せば辺り一面に果樹園が広がる福島市。その一角で、太陽の光をしっかりと当てて真っ赤なももを作っているのが樺山和宏さんです。幼い頃から父・和一郎さんに「農業はいいぞ」と繰り返し聞いて育った和宏さんは、家業を継ぐことに何の迷いもなかったと笑顔で答えます。

現在、お二人は10人のパートナーの手を借りながら7月から9月まで収穫できる13種類のももを育てています。農家の天敵は天候。そのシーズンの果実の良し悪しに大きく影響します。収穫間近に雨が降ると、水を吸ったももは糖度が下がってしまい、今までの苦労が一瞬にして水の泡です。しかし1品種が良くなかったとしても、その後に収穫を控えた品種でフォローできます。「おいしい果物を作っていればおのずとやっていけるということです」と和宏さん。昨夏の長雨でも和一郎さんは動じることなく淡々と次の品種の管理をしていたそうです。「私も家業を継いで19年になりますが、父はさすが、肝が据わっているなあと改めて思いましたね」。

景観を含めた産地づくりで福島農業を変える

ももを食べた人の「おいしい！」が最高の喜びと語るお二人。目下の悩みは、人手不足だと言います。実は農業は、地域の自然環境を守るという役目も持っています。後継者のいない農地を荒らさないよう規模を拡大して果樹園経営をしようとするときに、ぶつかる壁が人手不足なのだそう。それでも和一郎さんは、「農業は無限の可能性を秘めている」と熱く語ります。経営基盤を盤石にし

ながら技術を磨き、工夫を重ねていけば福島のももが生産量トップになるのも夢じゃないとおっしゃいます。「果物は、果実だけでなく花も香りに染めて人々を喜ばせるももの花の華やかさは圧巻です。次世代には、ぜひ景観を含めた産地づくりをして欲しい」と息子を含めた福島のももの未来をつなぐ若手農業者に期待を寄せる和一郎さん。実現したら、さらに素敵な福島になるはず。楽しみです。



もみやま わいちろう 樺山 和一郎 さん

農林水産大臣賞や大日本農会緑白綬有功章などを受賞している果樹園の4代目。息子と共にサクランボ40アール、もも160アール、リンゴ230アールを栽培している。平成29年、JAふくしま未来の「農の匠」の認証を受けもも栽培の指導者としても活躍中。



もみやま かずひろ 樺山 和宏 さん

樺山果樹園の5代目。大学卒業後、県農業総合センター果樹研究所の研修生として1年間学び、23歳で家業を継ぐ。430アールの果樹園は父と子で分けて担当。後学のために父の畑を見に行くことも。